

旭精工 ～高精度な機械で現金取引の円滑化を実現～

旭精工は、長年培ってきた「ものづくり」の技術を活かし、キャッシュレス化に対応した電子取引用機器を開発した。

(写真) 旭精工の創業者兼代表取締役会長の安部寛氏と代表取締役社長の安部一哉氏

(本文)

日本の中小企業は、モノづくりの精神と技術力を活かし、数々の高品質な製品や部品、機械を世界中のお客様にお届けしてきたが、その中でもニッチな分野で活躍してきた。規模は小さくても、品質、性能、技術、信頼性などの面で高い評価を受け、精密機械の開発を中心に各分野でトップクラスのシェアを誇っている企業も少なくない。

旭精工は、1969年に安部寛氏が創業して以来、各種自動販売機、ATM、セルフレジ、アミューズメント機器などに使用されるコイン・カードユニットのトップメーカーとして成長してきた。埼玉と栃木にある旭精工の工場には、最先端の技術と加工機が導入されており、厳しい品質管理のもと、機能性、耐久性、安全性に優れた製品を迅速に提供することができるため、欧米をはじめとするグローバルな顧客に選ばれ続けている。

代表取締役会長の安部氏と話していると、機械に対する情熱が伝わってくる。彼は、モノづくりの象徴である「からくり人形」の発明者として名を馳せた東芝の創業者・田中久重が日本のモノづくりの原点だと述べている。

「日本にまだ精密なモーター機構がなかった時代に、このような面白い自動機械を最初に作ったのは日本人です。細部にまでこだわったその姿勢は世界を驚かせ、戦前には世界中にからくり人形が広まりました」と安部会長は説明する。

「私は、それぞれの国にはあるメカニズムや技術があって、それが発展して今があると考えています。日本の場合、細部へのこだわりが、機械やモーター、エンジンなどの大きな技術的進歩の先駆けとなったわけです。」

旭精工の50年の歴史の中で、日本には多くの技術的進歩が起きた。旭精工自身も、お客様や業界の絶え間なく変化する要求に応えるために、常に技術革新を行い、貴重な貢献をしてきた。その中でも、安部会長自身が考案した「自動釣銭機」は、特許を取得している。安部氏は、「この機械の日本での特許は20年後に切れますが、それに関連した新しい機構を加えて、今でも世界各国に販売しています」と説明する。

キャッシュレス社会が到来した現在、同社は電子取引用機械の事業に進出しているが、カードディスペンサーやコイン用機械（コインホッパー、コインセレクター、コインチェンジャー、コインリサイクル機など）は当面の間、同社の主力事業であり続ける。

安部社長は、ブランド名を「AsahiSeiko」から「Asahiseiko」に変更した経緯について、次のように述べている。「当時、デジタルマネーやキャッシュレス化が進んでいたこともあり、その流れに乗って、電子取引用の機械にも視野を広げていこうと考えました。このニッチな分野での活動が、2018年のリブランディングの背景にあります。」また、新型コロナの流行により、衛生面での懸念からキャッシュレス化が加速する中、旭精工では新技術による機械の抗ウイルス・抗菌性の向上にも力を入れている。

旭精工は、現金輸送業界に新たな革新をもたらし続ける一方で、すでに60の国と地域に進出しているグローバル市場での存在感をさらに高めていきたいと考えている。「長い間、多くの海外のお客様が、当社の技術、信頼性、品質を信頼して当社の製品を購入してくださっています」と安部氏は語る。「当社の国際戦略は、継続的に拡大し、迅速・正確・安価な提供でお客様のニーズにお応えする努力をすることを軸としています。」